

令和6年度 富山中部高等学校アクションプラン - 1 -		
重点項目	学力の向上	
重点課題	①教育目標の実現のため、深い学びを目指した授業を行う。また、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていく。 ②生徒がテスト等によって学力を自己分析し、主体的に学習を進めることができるよう指導助言を行う。	
現状	①授業力の向上を目指して互見授業等を行い、教科別授業研究会の充実に努めている。 ②課題をこなすことに終始し、テストによる学力分析と事後対策が不十分な生徒が多い。	
達成目標	①授業力の向上を図るため、互見授業を行ったり、教科別授業研究会を行ったりする。 教育課程研究委員会において、新教育課程の実施状況とその効果を評価する。	②各種テストの見直しを行い、その後の学習計画を自主的に作成・修正し、実践できた生徒の割合（学習アンケート）
		70%以上
方策	○互見授業を全教員に対し公開する。 ○互見授業終了後、教科別授業研究会を開催し、3年間を見通した指導法や指導目標を共有する。 ○SSHの取組により開発した探究的な手法を普通教科の授業にも導入する。 ○教科横断型授業のための教材を、他教科と連携して開発する。 ○個々の学力や進度に応じた教材について、研究開発をさらに進める。 ○定期的に生徒の学力や学習実態を分析し、授業方法の改善をはかる。	○読解力・思考力・判断力・表現力等を育むような質の高いテスト作りに努める。 ○校内模試においてテスト解説授業を実施し、テストを見直す意識を高めるとともに、その後の学習の指針を示す。 ○テストの見直しにより、学習活動におけるPDCAサイクルの徹底を図る。 ○担任や教科担当者による個別指導の充実に努める。 ○新入生合宿で高校での学習法をしっかりと身につけさせる。
達成度	・各教科年間2回以上実施した。	・テストを見直す意識が「強くなった」または「強くなった教科もある」と答えた生徒84% ・「テストでできなかった分野の復習を学習計画に取り入れている」と答えた生徒68% （学習アンケートは1月のもの）
具体的な取組状況	《互見授業・教科別授業研究会》 1学期・2学期を通じて46名の教員が「授業研究のための公開授業」を行った。授業実施後は、教科別の協議会や授業研究会を持ち、生徒の学力、学習実態について分析するとともに授業力向上に向けた指導法の検討を行った。	
	《テストの見直し、自主的な学習計画》 1学年 ・課題チェック表を配布し、生徒に自主的に学習計画を立てて課題に取り組ませている。また、定期考査や実力テストの前後で、生徒がひっかかりそうな問題について解説動画を作成し、Google Classroomにアップしている。（数学） ・ホームリーダーを読み終えた感想を書かせ、良いものはフィードバックして自主的に取り組むよう促した。日頃の小テストを徹底し、直しを提出させるなど、復習の徹底を図った。（英語） ・小テストを継続的に実施し復習を促すとともに、定期的に教科通信を発行し、授業で扱った教材に関連する情報を提供し、知識が定着するよう工夫している。（国語） ・長期休業中の課題に効率的・計画的に取り組めるように、計画表の提出を休み前後で徹底し、担任面接で学習方法についてアドバイスを行っている。	
	2学年 ・考査の終了後に、解き直しプリント、解き直しノートを提出させる。 ・11月、1月実力テスト終了後に解説授業を2時間行い、出題者の意図や解法を解説し、テストの見直しを促している。 ・長期休業中の課題に効率的・計画的に取り組めるように、計画表の提出を休み前後で徹底し、担任面接で学習方法についてアドバイスを行っている。 ・長期休業前に教科担当による教科面接を行い、個々の現状に応じた助言を行った。	

	3 学年	- 各進学模試終了後、『模試解説授業』を行い、問題設定の狙いや解法の解説を行い、テストの見直しを意識づけた。 6～7月、9月～11月の難関大講座では、志望大学の問題に慣れると同時にそれぞれの大学に応じた問題傾向を説明することで、自主的な学びにつながるようにした。 - 生徒の学力を学年会議において定期的に分析し、担任による個人面接、教科担当による教科面接を行い、個々の現状に応じた助言をした。
評 価	A	《互見授業・教科別授業研究会》 - 互見授業を行い、授業改善につなげている。 - 教科横断型の教材の開発が進められた。 - 各教科において2回以上の教科別授業研究会が実施され、その概要が報告されており生徒の主体的、対話的な深い学びを意識した授業方法の改善が検討されている。
	B	《テストの見直し、自主的な学習計画》 1 学年 - テスト後の見直しをしている教科は、数学が3教科の中で最も高いが、過年度と比較すると「簡単に確認する程度」ととどまる者が多い。 - テストの見直しをする意識はあるが、次の課題や予習に時間をとられ十分に時間がとれないと感じている生徒の割合が高い。
		2 学年 - テスト後の見直しをしている教科は、数学(約70%強)が3教科の中で最も高い。理系が多い学年であり、国語・英語の見直しの割合が低いのが問題点である。 - 地歴、理科への見直しの意識は過年度に比べ少し高い。
		3 学年（9月のアンケート結果より） - 英語、数学においては「ほとんど何もしない」生徒が1割未満である。解き直しまでしっかり行い、次回に備えようという意識が高い。 2年次と比較してテストを見直す意識が強くなったと答えた生徒が9割を超える。解説授業が「すごく」ためになっているという生徒も半数に近い。
学校評議員の意見		《互見授業・教科別授業研究会》 - 互見授業は、自分の授業を客観的にとらえ、情報交換の場となる点ですばらしい。見られることにストレスがなければよいと思う。 - 授業改善のひとつとして挙げられた、海外とオンラインで交流する授業は評価できる。時差の問題などはあるだろうが、もっと機会が増えるとよい。
		《テストの見直し、自主的な学習計画》 - テストは見直すことで学習効果が高まる。そのためには、まずテストそのものが良問であることが大切である。 - 解説動画のアップなど、生徒の自主的な学習をサポートしてくださっているのはありがたい。
次年度へ向けての課題		《互見授業・教科別授業研究会》 - 次年度は生徒の自主学習時間の確保および教職員の働き方改革のため、定期考査の日程を見直し、土曜日の考査をなくすことにした。新教育課程で科目数が増加している中で、授業時数を減らすことになる。生徒の学力を担保し、希望する進路の実現をはかるために、授業で扱う内容、課題の与え方、作問の工夫、アクティブラーニングやICTの効果的な活用などについて、さらなる研究が必要となる。互見授業で実践を共有し、授業研究を行う機会は今後も設けていきたい。 - 教科横断型の授業は生徒にも好評であり、よい刺激になっている。次年度も計画し、実践していく予定である。
		《テストの見直し、自主的な学習計画》 「テスト後できなかった分野を学習計画に取り入れている」生徒が1、2年生でやや減った。3年次になると復習の必要性を自覚し主体的に取り組む生徒は増えるが、低学年の生徒にテストの見直しを習慣づけるためには「見直しプリントの提出を求める」「週間課題・週末課題として課す」「解説授業を行う」といった外発的な動機づけも必要である。数学の解き直しに偏る傾向も見られるが、バランスのとれた基礎学力を育てるためにも偏りのない学習を勧めたい。 - 新教育課程で求められる観点別評価の趣旨をふまえ、生徒が立案した学習計画や学習実態を担当や教科担当者が把握し、評価および指導を行う必要性が高まっているが、生徒・教員の双方にとって負担が大きい。

評価基準

A達成した Bほぼ達成した Cあまり達成しなかった D達成しなかった

令和6年度 富山中部高等学校アクションプラン - 2 -		
重点項目	進路意識の高揚と進路希望の実現	
重点課題	①広い視野に立ち、自己の将来像に連なる明確な進路目標を見つけさせる。 ②第一志望をあきらめず、難関大学への進学に向けて主体的に努力できる生徒を育む。	
現状	①全員が大学への進学を希望している。しかし、進路に関する視野が狭く、志望する大学や学部により偏りが見られる。男女問わず、より広い知識やグローバルな視点を持たせたい。 ②高い目標を維持させるために、具体的な目的意識やその達成に至る道筋の具体的なビジョンを得させることが必要である。	
達成目標	①自己の将来についてより広い視野に立って考えることができる	②難関10大学+国公立大学医学科への出願者および合格者の割合
	・講演会・大学探訪・海外研修・探究活動を通して、新しい学問分野や進路の存在を知る。 ・自分と自分をとりまく社会や世界についての理解を深め、それに基づいて自己の将来像を描く。	難関国立10大学と国公立大学医学科に出願し合格する。 ①3年在籍生徒数に対する出願率 55%以上 ②3年在籍生徒数に対する合格率 30%以上
方策	○2学年の7月に「アメリカ研修」、8月に「大学探訪」を行い、知的刺激を与え、視野を広げさせる。大学探訪では、大学生（卒業生）から話を聞き、具体的ビジョンを構築させる。 ○海外の大学などについても情報を提供する。 ○自己の将来像について具体的なイメージを持たせるとともに、進路に関する視野を広げさせるため、1学年の生徒（および2学年の希望者）に対し進路講演会を行う。	○面接指導や学年集会、および進路に関する行事を通して、早い時期から高い進路意識を持たせるよう指導する。また3学年では個別指導を強化し、生徒一人一人が志望大学の要求する学力に到達するように努める。 ○第1志望への合格を実現させるために、教員全員の体制で添削指導や難関大講座などを展開し、生徒一人一人にきめ細かく支援する。
達成度	・「大学探訪」でも「アメリカ研修」でも、多くの生徒が刺激を受けたと答えている。	①出願率は53.1%。共通テストの平均点が高く、第一志望を貫き、出願する割合が例年より高かったように思われる。 ②前期合格者は難関10大学56名（昨年59名）、医学部15名（昨年18名）、計71名（昨年77名）合格率は25.8%（昨年28.2%）であった。
具体的な取組状況	1 学年 ・「企業施設研修」を10月18日（金）に探究科学科2クラスで実施した。榊田酒造やスギノマシンなど、地域に根ざしながら産業や文化を生み出している企業を見学したり、イタイイタイ病資料館を訪問して知見を広めたりし、職業観を育て就業を見据えた文理選択や学部・学科、大学の選定に役立てた。 ・社会の様々な分野で活躍されている方々を招いて「進路講演会」を実施した。弁護士、公務員、税理士、人事、経営、理工、建築、起業、農業、マスコミ、心理学、教育、医療行政、医師、薬学等の分野から15分科会を設定し、生徒は希望する2分野の講演を聴いた。	
	2 学年 ・7月にアメリカ研修を実施した。男子12名、女子28名の計40名が参加した。ホームステイ、語学研修のほか、現地大学や施設の見学を通して風土や価値観の違いをはじめ多くのことを経験し、視野を広げた。海外への進学や海外での活躍も視野に入れて自分の進路を考える機会になった。 ・8月に大学探訪を実施（180名参加）した。東大生との懇談は生徒の意欲を大いに高めた。実際にキャンパスを歩き、模擬授業を受けたことは良い経験となった。 ・3月17日に大学生や今年受験を終えた卒業生を招いて「卒業生に学ぶ会」を予定している。	
	3 学年 ・高きを目指し授業を大切にし、粘り強い学習を行うように、担任の面接や学年集会における生徒への日々の働きかけの中で繰り返し呼びかけた。 ・定期考査や進学模試を通じて、PDCAサイクルでの学習を指導している。 ・7月と9月～11月の放課後に特別講座を開講し、学力の伸長を図るとともに、目標達成に向けた学習計画を意識させた。 ・全教科にわたって、受験まで個別添削指導を行っている。	

評価	B	《進路講演会》 ・経験に基づく貴重なお話を聴くことができ、生徒満足度は80%を超え（生徒アンケート）、有意義な時間を持つことができた。 《大学探訪》 ・実際に大学を歩き、先輩の話を聞くことによって多くの生徒が具体的なビジョンを得て、学習意欲を高めた。 ・東京大学等で先輩の話を聞いたり、企業や官公庁を訪れたりすることで、事後アンケートでは、多くの生徒が高い満足度（「とてもよかった」「よかった」は約95%）を感じていた。 《アメリカ研修》 ・ホームステイ、スタンフォード大学等の見学、シリコンバレーの施設見学など、生徒の視野を広げるメニューが充実しており、生徒は大いに刺激を受けていた。 ・地理の授業の一環として、現地の生徒と在校生徒をオンラインでつなぎ、アメリカの文化や生活について情報交換を行った。
	C	出願率はほぼ目標を達成した。合格率が目標未達であったため評価はCとしたが、例年同様、志望大学の合格に向けて最後まで努力し、合格を勝ち取る姿が見られた。
学校評議 の意見		《大学探訪・進路講演会・アメリカ研修》 ・生徒の視野を広げ、学習意欲を高める点で効果的である。研修に参加していない生徒とも学びを共有する工夫ができるとよい。 ・風土や価値観の違いを多感な時期に経験できることは将来の進路に大きく影響すると思う。
		《進路の実現》 ・これからは今まで以上に職業領域が拡張していくので、将来に向けて信頼のおける情報提供をお願いしたい。 ・グローバルに活躍する人が育ってほしいと思う一方、人口減少が止まらない富山に留まり、あるいはUターンして地元を盛り上げる人材に育ってほしいとも思う。
次年度へ 向けての 課題		《進路講演会》《大学探訪》《アメリカ研修》 ・どの行事も、高まった生徒の学習意欲を維持させ、実践につなげていくことが課題である。 ・高大連携事業をはじめ、大学からの模擬講義の企画が増えてきている。また、海外研修も生徒の実態に応じた多様な企画が提案され始めつつある。生徒の知的好奇心を醸成するうえでも積極的に取り入れていきたい。
		《進路の実現》 次年度は1学級（生徒数約40名）減となる。「第一志望を貫き、難関大学への進学に向けて」の重点目標や基本的な指導体制は変わらないものの、時代に対応する新たな目標設定が必要となる。

評価基準 A達成した Bほぼ達成した Cあまり達成しなかった D達成しなかった

令和6年度 富山中部高等学校アクションプラン - 3 -		
重点項目	読書指導・体力の向上	
重点課題	①読書指導を充実させ、図書館及び図書の利活用を促進する。 ②体力の向上に努めさせる。	
現状	①探究活動や授業、進路研究などで資料や情報を収集し利用する機会が増えている。しかし、日常的に生徒が図書資料を検索するまでに至らず、図書資料を利用しているとはいえない。 ②体力の低下が危惧される生徒が増えてきている。	
達成目標	①レファレンス（資料や情報を求める人への支援）を利用した数	②2年次において、持久走の自己最高記録を更新した生徒の割合
	100人以上	70%以上
方策	○蔵書検索システムをオリエンテーションや読書の時間、広報で生徒に周知し、主体的に活用できるよう支援する。 ○探究的な学習活動や授業、生徒の進路研究等と連携し、資料や情報の提供を適宜おこなう。	○全学年、体育の授業時に、毎時10分間程度のサーキットトレーニングを実施する。 ○前年度の自己記録を参考に今年度の自己目標を明確にし、体育の授業や部活動などで意欲的なトレーニングに結びつける。
達成度	・レファレンス（資料や情報を求める人への支援）を利用した数 157人	・2年次において、持久走の自己最高記録を更新した生徒の割合 81%

具体的な 取組状況	《読書・広報活動》 ・年度初めの読書の時間で蔵書検索システムの使用法を周知、体験する時間をとった。 ・各学期に1回以上は、読書体験のきっかけ作りとして、オリエンテーションやビブリオバトルなどを図書館で実施し、レファレンスしやすい環境作りを行った。 ・資料や情報を求めるレファレンスの内訳は司書や司書教諭との対面によるものが97件、蔵書検索機能を使ったものが60件あった。 ・授業や課題等で利用したい書籍を、富山県立図書館から45冊（生徒25冊、職員20冊）借り出した。 ・7月に1年生各クラスで高志の国文学館訪問を実施し、富山県ゆかりの作家や作品、特別企画展「長谷川義史のえほん展」を鑑賞した。その後関連する本のレファレンスがあった。	
	《体力の向上》 ・サーキットトレーニングの意義について理解させ、トレーニング効果が上がるように実施した。	
評価	A	《読書・広報活動》 ・外部施設との連携により適切なレファレンスができ、図書や資料、情報の提供をおこなうことができた。
	A	《体力の向上》 ・継続して行ってきたことで、トレーニング効果が上がっていることを自覚することができ意欲的に取り組むことができた。
学校評議員の意見	《読書・広報活動》 ・論理的な思考力や表現力を伸ばすためにも、読書会やビブリオバトルを通して読書を推奨していくことは有効だと思う。 ・デジタル化の進展など外部環境の変化もふまえて図書館の役割を再構築すべきと考える。正しい情報の選択方法についてのスキルを上げることも重要になるだろう。	
	《体力の向上》 ・体力向上の指標は、体幹とかストレッチとか、将来にわたる基礎的な体力維持のために家でも取り組めるものとか、生涯にわたり取り組めるものとかもよいのではと思う。また、メンタルヘルスや睡眠管理も重要である。	
次年度に 向けての 課題	《読書・広報活動》 ・図書館の情報が生徒に「伝わる」ため情報発信のデジタル化をすすめる。 ・図書館活用の方法や必要な資料・情報へたどりつく方法のガイダンスを行い、自ら学び考える支援をする。	
	《体力の向上》 ・自己の体力、課題を把握し、積極的に取り組む姿勢の育成をはかる。 ・各自の体力に応じて、運動負荷の強度を設定する。	

評価基準 A達成した Bほぼ達成した Cあまり達成しなかった D達成しなかった

令和6年度 富山中部高等学校アクションプラン ー 4 ー		
重点項目	学校行事・部活動の充実	
重点課題	①ホームルーム活動を充実させる。 ②部活動をより充実させる。	
現状	①ホームルームの時間においては、討論と読書を行っている。討論では、各ホームで決めたテーマについて思考を深め、意見交換を行っている。読書では年間の冊数を決めてあらゆるジャンルから知識や教養を深めている。半期に一度の統一ホームルームでは、全校生徒が同一テーマについて話し合い、後日冊子にまとめている。 ②全校生徒に対し、いずれかの部に所属するよう勧めている。生徒は自己実現や人間的な成長のため、学習と部活動を両立させようと努力している。	
達成目標	①充実したホームルーム活動を行う。 ・生徒が主体的に実施し、積極的に参加できるような活動にする。 ・自身について、社会について思考を深め、活発な意見交換が行われる場とする。	②部活動に充実感を得た生徒の割合 ＊1、2年生部活動加入者を対象にした、2学期終了時のアンケート
		70%以上

方 策	○討論や読書に対する取り組みについて、各ホームにおいて常に評価し、改善を図る。 ○統一ホームルームにおいて、ホームルーム運営委員会を中心に役割分担し、活発な意見交換を行う。		○部活動への参加を積極的に促す。 ○限られた時間の中での、効率的な練習や活動を普段から考えさせる。 ○個々の生徒が、学習と部活動のバランスが取れるよう、ホーム担任と部顧問が連携を取って指導する。
達成度	・統一ホームルームにおいて、討論のための準備や運営など活発な意見交換を行えた。		・76%の生徒が充実感を持って活動している。充実度にはとくに一緒に活動する仲間の存在が大きい。
具体的な取組状況	《ホームルーム活動》 ・テーマ設定から討論の運営を自分たちで役割分担を決めながら行っていた。 ・ホームルーム読書では年間3～4冊落ち着いて読むことができた。 《部活動》 ・部活動の活動時間の確保に努めたり、環境の整備に取り組んだり、活動場所については有意義な活用方法などを生徒同士で意見交換を行いながら活動した。		
評価	A	《ホームルーム活動》 ・年間2回の統一ホームルームでは、同一のテーマを各ホームで様々な切り口で深く追究し、議論している。自分たちで運営し、活発に意見交換を行うことができた。 ＜前期＞ 恋愛 ＜後期＞ 命の道德	
	A	《部活動》 ・各部の目標を見据え、学習と部活動の両立を考えながら部活動を行った。運動部学芸部とも全国大会・北信越大会で、好成績を収めた生徒が多かった。	
学校評議員の意見	《ホームルーム活動》 ・本校の生徒は将来指導的な立場になることが多いと思う。討論の時間は、自分の考えを述べることで、異なる意見が出たときに組織としてどうまとめていくかを学べる貴重な場だと思う。 ・Dの時間やビブリオバトル、討論など、生徒が主体的に活動している点が評価できる。		
	《部活動》 ・限られた時間の中での活動で、多くの生徒が成果を上げていたいへん素晴らしいと思う。 ・顧問の先生方の負担も考慮が必要かと思う。思うほど地域移行は進んでいないが、プロスポーツチームのユースチームなど、選択肢が広がりつつある現在、活動する本人、指導者ともに柔軟な対応が必要なのかもしれない。		
次年度へ向けての課題	《ホームルーム活動》 ・討論のテーマを設定する段階で、安易なテーマ設定にならないよう、自分たちの身近なテーマや現在の社会情勢なども積極的に取り入れる。統一ホームルームにおいては人文社会系、科学系のテーマを1つずつ設定する。		
	《部活動》 ・部活動において成績や結果を残していくことを目指しながら、そのために生徒があいさつ・礼儀を正したり、視野を広くしたり試行錯誤したりするなどの経験を繰り返しながら人間的に成長することを期待するとともに、あらゆる知識と経験を積めるようにしていく。		

評価基準 A達成した Bほぼ達成した Cあまり達成しなかった D達成しなかった

令和6年度 富山中部高等学校アクションプラン - 5 -			
重点項目	学校教育全体を通じた「探究力」の伸長		
重点課題	①外部と連携した課題研究を充実させる。 ②教科横断型授業「中部アカデミックス」を実施する。 ③データサイエンス(DS)に関する授業を実施する。		
現 状	①県庁や様々な企業と連携しながら課題研究を行ってきたが、継続的な取組になっていない。 ②これまでに2回教科横断型授業が行われた。(国語、世界史、化学、美術) ③探究科目において、情報技術に関する授業を実施している。		
達成目標	①継続的に外部人材と連携しながら、課題研究を行う。	②複数の教科で教科横断型授業「中部アカデミックス」を実施する。	③1年生ではDS探究(基礎)、2年生ではDS探究(応用)、3年生ではDS探究(発展)の授業計画を作成し、実施する。

方 策	○テーマ選びから外部人材に関わってもらう。 ○検証方法や考察の段階でも指導・助言をもらう計画を立てる。			○各教科で教科横断型授業に適する単元をまとめる。 ○教科横断型授業に適する単元のマッピングリストを作成する。 ○教科横断型授業の指導案を作成する。			○専門家の助言の下、データサイエンスに関する授業計画を立てる。 ○特別授業等を利用して実施し、効果を検証する。		
達成度	・ 3 4 班のうち 2 2 班が外部と関わりながら探究活動を行った。			・ 1 学期に 2 件、2 学期に 2 件実施した。			・ D S 探究（基礎）の授業計画を作成し、実施した。		
具体的な取組状況	《外部連携》2 年普通科課題研究 「S S 探究Ⅱ」								
	・ 本校に来てご指導いただいた 9 事業所								
	・ 生徒が訪問したり、電話したりしてご指導いただいた 約 4 0 事業所								
評価	《中部アカデミックス》								
	・ 英語×地理 2 件、化学×公民、美術×化学が行われた。								
	・ 教科ごとのマッピングリストを作成した。								
評価	《データサイエンス》								
	・ 3 時間でデータ収集や分析手法などを学ぶためのワークシートを作成した。								
評価	A		《外部連携》						
	B		《中部アカデミックス》						
	B		《データサイエンス》						
学校評議員の意見			・ 複数の企業の方から話を聞きながら、課題研究をすることで、内容が深まった。						
			・ 積極的に外部機関に訪問する生徒が増えてきた。						
学校評議員の意見			《中部アカデミックス》						
			・ 4 件の教科横断型授業が行われた。						
			・ マッピングリストを作成したことで、他教科の要望がわかった。						
学校評議員の意見			《データサイエンス》						
			・ 1 年次「D S 探究（基礎）」の授業計画とワークシートを作成することができた。						
学校評議員の意見			《外部連携》						
			・ 外部連携により、生徒の探究力だけでなく、社会性も同時に養われていると思う。活動を通してプレゼン能力も伸び、大学の総合型選抜などに対応できる力もつくと思う。						
			・ 連携先については、同窓会も利用してほしい。						
学校評議員の意見			《中部アカデミックス》						
			・ 教科横断型授業は予想できない化学反応が起きることにワクワクする。準備は大変だと思うが取り組みに期待する。						
			・ とてもユニークで素晴らしい取り組みである。多面的な切り口で、思考の幅を増幅させられたらよいと思う。						
学校評議員の意見			・ 事例共有の場を設け、他教科での展開を促す取り組みも必要である。						
			《データサイエンス》						
			・ データサイエンスについては、外部の専門家からの指導も必要になるだろう。						
学校評議員の意見			・ 今の高校生が社会に出る頃には、生成AIの利用が各分野で当たり前になっていると思われるので、利用についてのルール作りから生徒に考えさせて、活用ができるようになってほしい。						
次年度へ向けての課題			《外部連携》						
			・ 年間を通して、継続的に連携できる班を増やす。						
			・ すべての班が外部と関わるようにする。						
次年度へ向けての課題			《中部アカデミックス》						
			・ 指導案を作成し、蓄積する。						
			・ 継続的に実施する雰囲気を高める。						
次年度へ向けての課題			《データサイエンス》						
			・ 2 年次「D S 探究（応用）」と 3 年次「D S 探究（発展）」の指導計画を作成する。						
			・ 1 年次「D S 探究（基礎）」のワークシートを改善する。						

評価基準 A達成した Bほぼ達成した Cあまり達成しなかった D達成しなかった